

2024年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書			2025/9/27
団体名	NPO法人 自遊クラブ	活動タイトル	「ナラ枯木の伐採と土中環境の改善」,「針葉樹林の広葉樹の混交林化の推進」及び「植物と生き物調査会」
活動対象地域における生物多様性の保全に関する現状と課題			■活動風景
<p>・緑被地の減少傾向、外来種の分布拡大等により、生物多様性が危機にさらされている状況にある。そのため、相模原市は「水とみどりの基本計画・生物多様性戦略」として市内の主要な公共地域のみどりや水辺を連絡するエコロジカルネットワークを形成し、地域の生物多様性を保全し、そこから得られる生態系サービスを将来に渡って享受する社会を実現をめざす取組を進めている。弊団体の活動拠点である「つちざわの森」は私有地ながら「津久井湖」,「相模原自然の村公園」,「宮ヶ瀬湖」,「青山親水公園」,「青野原周辺」という水辺の拠点、みどりの拠点から約2-6kmの中間地点に位置し、小さな野鳥の飛翔距離上の中継地点として重要な自然環境と考えられる。</p> <p>課題として、ナラ枯れによる生物多様性に貴重な広葉樹林の荒廃、林床植生の悪化、外来種の侵入による植物、昆虫の種の減少、鳥類の減少という連鎖が進行しつつある。【年間のナラ枯れ被害材積（m）相模原市（2020-2023年）で毎年1000m以上の被害、神奈川県内の維管束植物の自生種 2,199 種のうち、122 種（5.5%）が絶滅、612 種（27. 8%）が絶滅危惧、66 種（3.0%）が準絶滅危惧に選定されている。】</p> <p>今後の取組により、林床の改善活動により、土壌の状態の改善、土に宿る種、実生、地域の土地に適した植物の育成活動の関係者、参加者を増やし、推進することで、生物多様性の回復と将来的な維持が可能な体制をつくりたい。</p>			<p>剪定バサミで樹木の实生を残す笹刈り</p>  <p>広葉樹（ナラ枯れ）間伐後エリアの再整備</p>
■活動報告			■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)
<p><b>1. 広葉樹（ナラ枯れ）エリアの土中環境改善と再生</b></p> <p>・ナラ枯れ木伐採材を机の天板として利用。その他部分：木炭、木酢液の材料として利用</p> <p>・広葉樹間伐エリアの間伐後の笹刈りにより、一時的に悪化した土中環境の改善</p> <p><b>2. 針葉樹エリアの混交林化</b></p> <p>・間伐及び広葉樹の苗木の植樹を実施</p> <p>共通（1＆2）</p> <p>・土壌採取と土壌分析を実施、分析結果受領し、土中の微生物、植物の生育に適した栄養素の状態が改善、向上している事実を数値で確認</p> <p><b>3. 植物と生き物調査</b></p> <p>・植物と生き物観察会を実施（3回※助成期間中2回）</p> <p>・生物多様性専門家とつちざわの森歩き&amp;シガラづくりWSを実施</p>			<p>・生物多様性の観点に基づく森林環境の把握、手入れの知識の習得（観察会、ワークショップ）とそれらを踏まえた森林整備の実践活動を実施した。</p> <p>・活動開始時の環境の把握（土壌の分析、植物、生き物の観察）と団体外の参加者数の増加、年齢層の拡大</p> <p>・相模原周辺の団体との連携活動の実践（間伐材の利活用。地元小学校机の天板、近隣の他のNPO団体での木炭づくりへの利活用）</p> <p>・都市部団体へのPR、連携施策の開始(伐採竹の23区内での利活用、パーゴラ作成2拠点。ランタンWS、商業施設BonusTruckでのイベント利用等)</p>
■事業を通じて得られたノウハウ			■望ましい社会状況を達成するための課題
<p>・チェーンソーによる間伐、搬出作業、バックホーによる作業道造成作業等の動力による大規模作業後に必要な生物多様性に配慮した手作業による整備作業（樹木の实生を残す剪定、植樹時のポサ置き作成、作業道法面のシガラづくり等）のノウハウを習得した。整備を複数回実施する中で自前で調達できる森林内の素材を活用を増やし、作業効率に配慮した独自の準備や手順を確立中。また植樹後に一部獣害を経験したことにより、苗木成時も考慮した植樹方法を考える教訓が得られた。</p> <p>・針葉樹間伐率が高めの比較的平坦なエリアでは、植樹後1ヶ月以内イノシシ等により根ごと掘り返し倒された苗木が続出した。土中には空洞が多く次の世代の木が発芽しやすい切り株の根元に植えた苗木（樹種によらず）に被害割合が多かった。理由の一つとして切り株の根元は元々昆虫の幼虫なども多く、野生動物に掘り返されやすい場所であることが一因と考察した。そのため、防獣ネットで囲わず、敷き藁によるマルチングのみ実施したところ、掘り返し被害がなくなり一定数の苗木が再生できた。</p>			<p>・市民団体として実施できる生物多様性に配慮した里山の手入れ、伐採、その後の手入れ手法などの確立。</p> <p>・郊外の森林（里山）整備活動と都市部等の他の地域との資源循環を通した連携と関係人口の多様化（若年化、女性比率の向上）</p> <p>・森林資源の活用ニーズ、付加価値の探求、発見。出口となる外部団体、企業などの関係組織の拡大</p> <p>・助成金以外の活動原資を得るための手法の確立。</p> <p>-他団体、個人への研修、ワークショップ等森林環境、団体の人的リソースを活かした有償イベントの開催</p> <p>-森林資源の外部団体、企業への搬出、活用による収益事業の開始</p>
<p>・植物と生き物の観察会の回数を重ねるたびに、リピーター及び新たな参加者、年齢層が増え、運用企画面での改善検討すべき事項の判明とともに協力者が増える効果が生まれた。</p> <p>・観察会では2回目以降クラブ外部の方（親子での参加）も増加した。そのため、限定エリアをゆっくり移動しながら植物、生物観察、質疑応答というパターンのみを一日実施するだけでは、一部参加者の興味が持続しない状況が発生した。そのため一定時間は森の素材を使った創作活動の時間や、森の様々なエリアを広く歩いてさまざまな風景、植生の変化を感じてもらうなど、時間帯によってグループ別の体験ができる企画運営の実現を改善事項と捉え、体制を検討している。</p>			<p>・生物多様性に配慮した里山の手入れに関して、従来の男性中心の「力で伐る」から高齢者や女性が安心して参加できる生態系を守る「観察力」「細やかな作業」へのシフトが必要。そのためには軽作業で「丁寧な作業」「創作」「学び」と相性のよい活動の場を広げ、そのようなスキルや関心をもつ人たちとの関係を広げることが重要と考える。つちざわの森は都市部（相模原市市街、横浜、町田、東京）から比較的近く、その地域の女性・若者の参加に地理的にも優位性がある。自然素材を利用したワークショップ、プログラム運営を都市部の団体と連携して実施、都市部の参加者を森での活動、ワークショップに参加してもらう人と物の行き来をつくることで対応できる可能性があるため。</p>
■活動成果のアピールポイント（自由記入）			
この1年間の活動を通じて	・間伐作業後に土中環境にばらつきがあること及びその後の整備により土中環境が改善、向上することに関して客観的な確認		を達成しました。
■受益者の具体的な変化（自由記入）			
<p>・団体の森林整備の作業において生物多様性に配慮したプロセスとして捉え、手順を試行錯誤しながら実施する動きがはじまった。</p> <p>・団体メンバーの森林整備時の植物、昆虫等の植生、生態系に関しての関心の变化、意識の向上。団体外部で森に関心を持つ方の拡大。</p>			